

Jリーグクラブのアカデミーにおける人間形成に関する研究

—カターレ富山に所属する選手のスポーツ的社会化—

沖田 諒¹・神野 賢治²

A Study on personality development in youth team of J league club

—Sports socialization of player belonging Kataller Toyama—

Ryo OKITA, Kenji KAMINO

E-mail:okita-r@japan-sports.or.jp

kamino@edu.u-toyama.ac.jp

【摘要】

本研究は、Jリーグクラブであるカターレ富山のアカデミーに所属する選手が獲得している社会性の構造および社会性の獲得要因を把握することで、カターレアカデミー選手の「スポーツ的社会化」の様態を明らかにすることを目的とした。カターレアカデミー選手を対象に観察調査および質問紙調査を行い、カターレアカデミーにおける人間形成の全体像を整理した。

結果、1) カターレアカデミー選手が獲得している社会性は、『主体性』、『目的遂行』、『立ち振る舞い』、『自己解決』で構成されていることが明らかとなった。2) カターレアカデミーにおける社会化要因に関して、『個人的属性』として「カターレアカデミーへの所属歴」、『重要な他者』として、「チームメイト」「指導者」「他のカテゴリーの選手」との関わり、『社会化場面』として「練習時間中のトレーニング」「練習時間後の自主練習」「試合前の道具等の準備」「試合前のチームで行うウォーミングアップ」への取り組みや「ホームゲームでのボランティア活動」「クラブの社会貢献活動」への参加経験が位置付いていることが明らかとなった。

本研究で得られた知見を基に、カターレアカデミー選手特有の人間形成の過程についてまとめた。

キーワード：Jリーグ、スポーツ的社会化、青少年、人間形成

Keywords：J league, sports socialization, youth, personality development

I 序章

1. 研究背景

2011年に策定されたスポーツ基本法において、スポーツは、「次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである」とされている¹⁾。様々なスポーツがある中でもサッカーは、推計実施人口が498万人と試算されていること⁹⁾や、子ども・青少年におけるスポーツ実施率も非常に高水準であること¹⁰⁾

に鑑みると、国内におけるスポーツ実施およびスポーツによる青少年の育成に最も寄与している種目の1つであるといえよう。

国内におけるサッカーの普及や発展に大きく貢献しているのが、公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Japan Professional Football league、以下、Jリーグ）である。Jリーグは、1991年に設立され、1993年に開幕した日本初のプロのサッカーリーグである。「日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進」「豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与」「国際社会における交流及び親善への貢献」の3つを理念として掲げ、プロサッカーの試合を基軸に様々な事業を展開している⁴⁾。

原田（2019）は、Jリーグにおいて、「プロで活躍できる選手には人間性は欠かせない」という判断

¹ 公益財団法人日本スポーツ協会 スポーツ指導者育成部

² 富山大学教育学部

のもと、Jリーグクラブ（以下、Jクラブ）が運営する育成年代の選手育成体制であるアカデミーにおいて、選手の人間性の涵養をリーグやクラブが志向していることを示した一方、学校部活動と比較して、人間教育の部分では後れを取っていることを指摘している²⁾。

日本サッカー界の発展の中核を担うJリーグのアカデミーにおける、育成年代の選手育成、とりわけアカデミーに所属する選手（以下、アカデミー選手）における人間形成の現状を把握することは、Jリーグや国内のサッカー界、ひいてはスポーツ界における青少年育成に向けて有用であるといえるだろう。

2. 先行知見の整理

1) Jリーグにおける選手育成の現状と課題

本論を進める上で、まずはJリーグにおける選手育成に関する先行知見について参照する。

能智ら（2020）は、Jリーグにおける若手層選手育成の観点から、若手選手の出場時間数に関する調査を行った。結果として、Jリーグ発足から参加していた歴史のあるクラブでは、選手育成環境の整備が進んでいるといえるが、Jリーグ参入から歴史が浅いクラブでは、アカデミー組織の整備が遅れているため、選手育成施策が進んでいないと推察している⁶⁾。

芳地ら（2019）は、Jクラブのユースチームに所属する選手の人材開発に関する研究を行った。研究対象であるユースチームを保有するクラブスタッフに対するヒアリングから、ユース年代の選手育成では、心理-社会的能力やコミュニケーション能力の獲得、自己理解の促進や自己の確立等に向けた実践的な取り組みの展開が喫緊の課題であることが明らかになったと述べている³⁾。

2) スポーツ的社会化

前項までに明らかとなった、Jリーグ及びJクラブにおける選手育成の現状について検証を進める上で、学術的理論を適用し、その定義を確認する必要がある。よって本項では、社会学の理論である「スポーツ的社会化論 (Sports Socialization)」について、先行知見を参照しながら確認を行う。

G.S.Kenyon & B.D.McPherson（1973）は、スポーツ場面における、『個人的属性』『重要な他者』『社会化場面』の社会化要因とそれらの相互作用による

役割学習の過程（図1）を、スポーツ的社会化と定義した¹⁾。

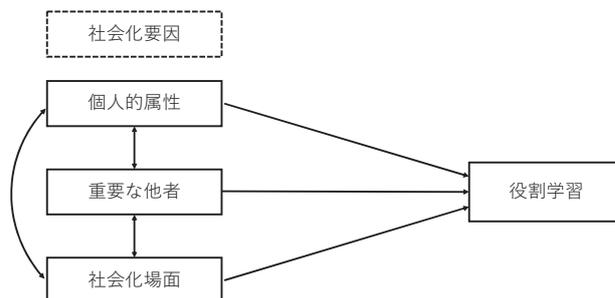


図1 スポーツ的社会化の枠組み

出店 (G.S.Kenyon & B.D.McPherson (1973) の図を一部改変)

太田と柳澤（2002）は、『個人的属性』は、性別や年齢など本人の多面的要素、『重要な他者』は、親、きょうだい、教師、コーチなど本人と相互作用し合う者、『社会化場面』は、社会化が行なわれる場における制度的、文化的状況、環境条件や生活場面の特徴、と定義している⁷⁾。

加えて、G.S.Kenyon & B.D.McPherson(1973)は、スポーツ的社会化について、「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」という2通りの概念を示した¹⁾。

三本松（1982）は、前者を「スポーツ参与の様式に応じてスポーツ役割が分類されており、その役割獲得の過程」、後者を「個人がある特定のスポーツ役割を遂行する中で獲得されるスポーツマンシップ、市民性等の、より一般的な態度、価値、技能、性向等を身に付けること」と定義している⁸⁾。

また、両者を同じ枠組みで捉えた上で、スポーツへの社会化の結果をより包括的に捉えたのが、スポーツによる社会化であると述べている⁸⁾。

山本（2012）は、スポーツによる社会化に焦点をあて、その本質を明らかにする研究を行っている¹⁴⁾。人格形成や社会性の獲得について、スポーツによる影響のみを厳密に規定することが困難であることや、非日常性という特性を持つスポーツによる社会化が、一般社会で広く求められる社会性の習得といえるのかということなど、スポーツによる社会化論の課題を挙げている。一方、スポーツの経験は良くも悪くも子どもに影響を与え、社会性の獲得に寄与するとした。しかし、単にスポーツを行えば子どもの人間形成や人格形成が実現できるのではなく、文

化や周囲の環境から様々な影響を受けた、ある種の限定的で不完全な社会性を、様々な社会との相互連関の中で確立していくことが重要であり、その過程において社会性獲得を助長するのがスポーツによる社会化であると結論付けている。

住田ら(2017)は、スポーツへの社会化概念を援用して、青少年の運動・スポーツ実施の有無に影響を与える要因を明らかにすることを目的に研究を行った¹²⁾。結果として、中学校期と比較して、高校期における運動・スポーツがより多くの要因から影響を受けていることが示唆されたとしている。加えて、中学校期と高校期ともに運動・スポーツ実施に対する態度が好意的である者ほど、運動・スポーツを実施していることも明らかとなった。

3) 先行知見のまとめ

Jクラブのアカデミーに関しては、アカデミーの選手育成の中でもエリート選手を育成する観点から選手育成の現状が整理されており、選手の人間形成の観点については、Jクラブスタッフの視点から、選手の様子やアカデミーにおける取り組みについて課題があることが確認できた。一方で、芳地らの研究はあくまでもチームビルディング・プログラムの導入に関する実践的研究であり、日常のアカデミーでの活動に関する検討や、アカデミーで活動する選手自身に着目した上での、アカデミーにおいて実現している人間形成の現状についての検討は行われていない。また、社会学的な視点からJリーグのアカデミーを対象としている研究は僅少である。

また、スポーツの社会化に関しては、スポーツ経験の社会化への影響を規定する難しさを踏まえ、特に子供や青少年といったスポーツ実施者における社会性の獲得について、スポーツ経験による所与のものとはせず、スポーツ実施者のみならず、周囲の環境や社会化要因等を包括的に対象として捉えた上で、複合的な視点からスポーツの社会化研究を進めていく必要性が確認された。

以上より、今後のアカデミーにおける選手育成体制の充実に向けて、競技者育成の観点と並んで、人間形成のための取り組みについて検討していくことが求められているといえよう。また、その検討に向けて、スポーツの社会化研究の枠組みに則り、育成年代の選手について、アカデミーにおいて実現している人間形成や、アカデミーに所属することを通し

て関わり、選手の人間形成に影響を及ぼしている社会化要因、社会化要因との相互作用を通じた社会化の様態について分析していくことは、非常に有用であるといえよう。

3. 研究対象とするJクラブの選定

カタレ富山は、2009年にJリーグに参入したサッカークラブである。カタレ富山のアカデミーでは、指導理念の中で「礼儀や思いやり・協力の精神の涵養などに努め、心身の健全な成長を促す」ことを掲げ、選手の人間形成を志向した取り組みを行っている⁵⁾。一方で能智ら(2020)の指摘⁶⁾から、Jリーグ参入からの歴史が浅く、選手育成に課題を抱えていることが予想される。

以上を踏まえ、本研究の対象として選定した。

II 研究目的

カタレアカデミーに所属している選手を対象に、スポーツの社会化の全体像を明らかにすることを目的とする。具体的に明らかにする事柄は、以下の3点に集約される。

- 1) カタレアカデミー選手が獲得している社会性の構造
- 2) カタレアカデミーにおける社会化要因
- 3) カタレアカデミーにおける選手のスポーツ的社会化の様態

III 研究方法

1. 研究対象

カタレアカデミーのU-18及びU-15チームおよび当該チームの所属選手を対象とする。また、カタレアカデミーにおける選手の人間形成の特質性を把握するため、同年代である富山県下の高等学校のサッカー部(以下、高校サッカー部)4校および中学校のサッカー部(以下、中学サッカー部)3校に所属している選手(以下、部活動選手)についても、本研究の対象とした。

2 調査概要

1) 一次調査

一次調査として、カタレアカデミーのスタッフにヒアリングを行ったうえで、2021年2月から4

月にかけて、カタールアカデミーのU-18年代及びU-15年代の活動を対象に、観察調査を実施した（表1）。

計6回実施し、カタールアカデミーにおいて、社会化要因と捉えられる他者との関わり及び活動への取り組みや、各状況における選手及び指導者の様子や発言について記録した。また、観察調査の前後には選手や指導者に対するヒアリングも適宜行った。

表1 カタールアカデミー選手の基本属性（全体、カテゴリー別）

日時	年代	場所	活動内容
2021年2月9日	U-15	永森記念グラウンド	練習
2021年2月10日	U-18	永森記念グラウンド	練習
2021年2月16日	U-15	永森記念グラウンド	練習
2021年2月16日	U-15	永森記念グラウンド	練習
2021年3月29日	U-18	永森記念グラウンド	練習
2021年4月4日	U-18	永森記念グラウンド	試合（リーグユース選手権）

2) 質問紙調査

カタールアカデミー（U-18、U-15）の所属選手を対象に、集合調査法による質問紙調査を行った。配布数及び回収数は85部であり、85部の有効回答を得た。有効回答率は100%であった。

また、部活動選手に対しても質問紙調査を実施し、配布数及び回収数は309部で、304部の有効回答を得た。

(1) 調査内容（*項目はカタールアカデミー選手への調査でのみ実施）

①基本的属性：「年齢」、「学年」、「カタールアカデミーへの所属歴*」、「現所属チームへの所属歴（部活動選手のみ実施）」、「カタール育成組織への所属経験*」、「現所属チーム以外のチームへの所属経験」、「チーム内での担当ポジション」、「公式戦註4）におけるメンバー入りした試合数」

②自身の将来に対する志向性について：「志望する将来の進路（目標）」、「アカデミーのユースチーム（U-18）への昇格に対する志向性*（U-15のみ）」、「トップチームへの内部昇格に対する志向性*」

③チーム内での他者との関わりについて：「チームメイト」「指導者」「クラブスタッフ（フロントスタッフ）*」「他のカテゴリーの選手*」

④チームでの活動について：「練習時間前の準備に対する取り組み」「練習時間前の各自で行うウォーミングアップに対する取り組み」「練習時間中のトレーニングに対する取り組み」「練習時間後の片付

けに対する取り組み」「練習時間後の自主練習に対する取り組み」「試合前の道具等の準備に対する取り組み」「試合前の各自で行うウォーミングアップに対する取り組み」「試合前のチームで行うウォーミングアップに対する取り組み」「試合に対する取り組み」

また、アカデミー選手にのみ、「トップチームのホームゲームでのボランティア活動」「クラブの社会貢献活動」への参加経験に加え、経験があると回答した選手に対し、その経験が現在の自身のカタールアカデミーでの活動に活かされているかどうかについて訊ねた。

⑤社会性について：山本ら（2013）が構成した「高校生版社会性測定尺度」において抽出された、4因子16項目¹³⁾を援用した。加えて、カタールアカデミーにおける指導理念及び価値観や、観察調査の結果から、社会性に関連する要素を検討したうえで、専攻領域の異なる研究者3名の協力のもと、社会性として捉えるべきである質問項目を選定し、本研究における社会性測定項目を作成した。

(2) 分析方法

IBM SPSS Statistics26を用いて、単純集計や因子分析、重回帰分析、t検定などを行った。

IV 仮説の提示

1. 一次調査で確認された社会化要因

太田と柳澤による社会化要因の定義、および一次調査の結果を基に、カタールアカデミーにおける社会化要因について整理した（表2）。

カタールアカデミーにおいて、「チームメイト」「指導者」「クラブスタッフ（フロントスタッフ）」「他のカテゴリーの選手」が、『重要な他者』になり得ると判断した。加えて、「練習時間前の道具等の準備」「練習時間前の各自のウォーミングアップ」「練習時間中のトレーニング」「練習時間後の道具等の片付け」「練習時間後の自主練習」という練習に関する場面や、「試合前の道具等の準備」「試合前の各自のウォーミングアップ」「試合前のチームのウォーミングアップ」「試合」という試合に関する場面が存在することが分かった。

また、学年や選手によって参加経験に差があるものの、カタール富山トップチームのボールボーイや会場設営などの「ホームゲームにおけるボランティ

ア活動」及び、クラブの社会貢献活動の一環である海岸清掃や病院でのパブリックビューイングといった「クラブの社会貢献活動」に、カタールアカデミー選手が参加していることについても把握できた。

上述した項目について、カタールアカデミーにおける『社会化場面』であると捉えた。

表2 観察調査及びヒアリングで確認された社会化要因と捉えられる要素

社会化要因	重要な他者	・チームメイト ・指導者 ・クラブスタッフ(フロントスタッフ) ・他のカテゴリーの選手
	社会化場面	・練習(道具等の準備、各自のウォーミングアップ、トレーニング、道具等の片付け、自主練習) ・試合(道具等の準備、各自のウォーミングアップ、チームのウォーミングアップ、試合) ・ホームゲームにおけるボランティア活動 ・クラブの社会貢献活動

2. 仮説

目的1) は、カタールアカデミー選手が獲得している社会性の構造を把握することである。

Jリーグにおける選手育成の現状や、原田(2019)の指摘²⁾、一次調査の結果などから、リーグ、Jクラブの両者とも、エリート選手の育成のみならず、人間教育や人格形成の視点が非常に重視されており、実際にカタール富山においても、選手育成方針への明記や、「ホームゲームにおけるボランティア活動」および「クラブの社会貢献活動」に選手を参加させるといった取り組みの実施等について把握できた。

よって、以下の仮説を導出した。

H1: カタールアカデミー選手は、社会性を獲得している。

次に、目的2) は、カタールアカデミーにおける社会化要因を明らかにすることである。

G.S.Kenyon & B.D.McPherson (1973) によると、『個人的属性』『重要な他者』『社会化場面』の3要因とそれらの相互作用から、スポーツ的社会化が説明されるとしている¹⁾。

また、一次調査では、太田と柳澤(2003)による社会化要因の定義⁷⁾から、カタールアカデミーにおける「チームメイト」「指導者」などの『重要な他者』や、「練習時間前の道具等の準備」「練習時間前の各自のウォーミングアップ」「ホームゲームにおけるボランティア活動」等の『社会化場面』といった、社会化要因であると判断できる要素が確認された。

よって、以下の仮説を導出した。

H2: カタールアカデミー選手の個人的な特性が、選手の社会性獲得に影響を及ぼす。

H3: カタールアカデミーにおける他者との関わりが、選手の社会性獲得に影響を及ぼす。

H4: カタールアカデミーにおける各種活動への取り組みや参加経験が、選手の社会性獲得に影響を及ぼす。

最後に、目的3) は、カタールアカデミーにおける選手のスポーツ的社会化の様態を整理することである。

前出の三本松(1982)による「スポーツへの社会化」及び「スポーツによる社会化」の定義⁸⁾を踏まえ、社会化要因との相互作用を通じて、実際のスポーツ場面で自身に期待されるスポーツ実施者としての役割や、その役割の遂行によるより一般的な性向や社会性等を学習、習得していく過程が、スポーツ的社会化であることを確認した。

また、山本(2012)は、スポーツ実施経験における社会化要因との相互作用を通じて、子どもたちが社会性を獲得していることや、その社会化過程において、スポーツ実施者の周囲の環境や社会の影響を受けることについて言及している¹⁴⁾。

よって、以下の仮説を導出した。

H5: カタールアカデミー選手は、社会性を獲得することで将来に対する志向性が変容する。

H6: 部活動選手と比較して、カタールアカデミー選手特有の人間形成の過程が存在する。

V 結果及び考察

1. カタールアカデミー選手におけるスポーツ的社会化の様態

1) サンプルの基本特性

カタールアカデミー選手の基本的属性を、カテゴリーごとに示した(表1)。なお、選手全体(85人)のうち、U-15年代は57人(67.1%)、U-18年代は28人(32.9%)であった。

2) カタールアカデミー選手が獲得している社会性の構造把握

カタールアカデミー選手が獲得している社会性の構造を把握するため、社会性の53項目を得点化し、探索的因子分析を行った(表2)。因子の抽出には主因子法、バリマックス回転を用い、天井効果を示

表3 カターレアカデミー選手の基本属性（全体、カテゴリー別）を挿入

項目	全体 n=85		U-15 n=57 (67.1%)		U-18 n=28 (32.9%)		
	%	n	%	n	%	n	
年齢	12歳	10.6	9	15.8	9	-	-
	13歳	24.7	21	36.8	21	-	-
	14歳	21.2	18	31.6	18	-	-
	15歳	15.3	13	15.8	9	14.3	4
	16歳	9.4	8	-	-	28.6	8
	17歳	14.1	12	-	-	42.9	12
	18歳	4.7	4	-	-	14.3	4
学年	中学1年生	23.5	20	35.1	20	-	-
	中学2年生	22.4	19	33.3	19	-	-
	中学3年生	21.2	18	31.6	18	-	-
	高校1年生	12.9	11	-	-	39.3	11
	高校2年生	15.3	13	-	-	46.4	13
	高校3年生	4.7	4	-	-	14.3	4
カターレスクール及びアカデミー 所属経験(複数回答)	なし	24.7	21	22.8	13	28.6	8
	あり	75.3	64	77.2	44	71.4	20
	スクール(U-6)	9.4	8	12.3	7	3.6	1
	スクール(U-8)	15.3	13	15.8	9	14.3	4
	スクール(U-10)	14.1	12	8.8	5	25.0	7
	スクール(U-12)	4.7	4	0.0	0	14.3	4
	スクール(ゴールキーパー)	3.5	3	3.5	2	3.6	1
	スーパースクール	58.8	50	73.7	42	28.6	8
	アカデミー(U-12)	8.2	7	12.3	7	0.0	0
	アカデミー(U-15)	20.0	17	-	-	60.7	17
他チーム所属経験(複数回答)	なし	0.0	0	0.0	0	0.0	0
	あり	100.0	85	100.0	57	100.0	28
	小学校のサッカーチーム	15.3	13	19.3	11	7.1	2
	中学校サッカー部	5.9	5	5.3	3	7.1	2
	スポーツ少年団	32.9	28	33.3	19	32.1	9
	地域のスポーツクラブ	58.8	50	56.1	33	64.3	18
	カターレ以外のJクラブの育成組織	2.4	2	1.8	1	3.6	1
その他	0.0	0	0.0	0	0.0	0	
ポジション	ゴールキーパー(GK)	12.9	11	14.0	8	10.7	3
	ディフェンダー(DF)	28.2	24	26.3	15	32.1	9
	ミッドフィルダー(MF)	44.7	38	43.9	25	46.4	13
	フォワード(FW)	14.1	12	15.8	9	10.7	3
進路志向(複数回答)	プロ選手	80.0	68	96.5	55	46.4	13
	就職	5.9	5	3.5	2	10.7	3
	進学	31.8	27	15.8	9	64.3	18
	その他	1.2	1	0.0	0	3.6	1
	特に決まっていない	5.9	5	3.5	2	10.7	3

した15項目、及び因子負荷量が0.40未満または複数の因子に対して因子負荷量が0.40以上を示した18項目を削除したため、解析対象は20項目となった。

第1因子は6項目で構成されており、行動や言動における主体性に関する項目であると捉え、『主体性』因子と命名した。

第2因子も6項目で構成されており、自分が志向

する目標や目的に対しての意識や取り組みに関する項目であると捉え、『目的遂行』因子と命名した。

第3因子は4項目で構成されており、組織やチーム内での自身の振る舞いや、役割への意識に基づいた行動や立ち回りに関する項目であると捉え、『立ち振る舞い』因子と命名した。

第4因子も4項目で構成されており、目の前の取り組みべきことや問題に対して、自主的に取り組む

表 4 社会性の因子解釈と構成項目

因子解釈と構成項目	因子負荷量				共通性
	F1	F2	F3	F4	
第1因子: 主体性 ($\alpha = .846$)					
33. 自信を持って大胆に行動することができる	.706	.248	.171	.085	.596
21. 自分の気持ちや考えを言葉や身振り手振りで表現できる	.689	.309	.204	.189	.648
11. 自分には、周りを励ましたり、元気づけたりする明るさがある	.615	.117	.307	.136	.505
31. 何事も自ら積極的に行動しようとする	.567	.364	.159	.109	.491
7. 自分の目標のために、何を、いつまでに、どれだけ達成するのかわかっている	.503	.238	.148	.199	.372
44. 様々な方法を使って必要な情報を得ることができる	.493	.318	.194	.169	.411
第2因子: 目的遂行 ($\alpha = .804$)					
19. どんな作業にも目的や意味を見出すことができる	.394	.639	.028	.050	.566
13. 他人の批判を受け入れ、自分の改善に取り入れる	.058	.567	.288	.248	.470
51. 何事においてもなるべく高いレベルの目標を設定するようにしている	.381	.536	.306	.219	.574
2. 自分を多少犠牲にしても相手のために行動できる	.253	.518	-.045	.074	.340
47. 自分のことは人任せにせず自分でできるようにしている	.294	.500	.279	.080	.420
53. 周りに対して、自分から働きかけることができる	.310	.412	.239	.355	.448
第3因子: 立ち振る舞い ($\alpha = .722$)					
34. その場面にふさわしい振る舞いをとることができる	.121	.055	.771	.191	.649
29. 自分とは違う意見でも尊重することができる	.238	.138	.568	.075	.404
26. チームや組織の中での自分の役割を意識して行動している	.230	.139	.522	.214	.391
36. 自分の感情をうまくコントロールすることができる	.195	.399	.435	.011	.387
第4因子: 自己解決 ($\alpha = .736$)					
15. 何事もまずは自分で考えてから行動している	.169	.060	.234	.806	.736
14. 問題が起こったとき、まずは自分で解決しようと取り組む	-.092	.314	.291	.593	.543
22. 多くの情報の中から、本当に必要な情報だけを取り入れている	.325	.078	-.101	.504	.376
1. 分からないことはそのままにせず、調べたり誰かに聞いたりする	.356	.095	.257	.462	.415
因子負荷量の2乗和					
	3.154	2.483	2.160	1.947	9.744
因子寄与率					
	15.77	12.42	1.80	9.74	48.72
累積寄与率					
	15.77	28.19	38.99	48.72	
因子間相関					
F1 主体性	—	.695***	.525***	.475***	
F2 目的遂行	.695***	—	.527***	.475***	
F3 立ち振る舞い	.525***	.527***	—	.416***	
F4 自己解決	.475***	.475***	.416***	—	

*** = $p < .001$

姿勢に関する項目であると捉え、『自己解決』因子と命名した。

信頼性の検討のため、クロンバックの α 係数を算出したところ、十分に信頼性が担保できる 0.70 以上の内的整合性が、全因子において示されたため、因子として適当であると判断した。

3) 社会性の獲得に影響を及ぼす要因

(1) 個人的な特性

個人的な特性に関する項目のうち、「年齢」、「カターレアカデミーへの所属歴」を独立変数、社会性を構成する 4 因子を従属変数として、重回帰分析を行った (図 2)。

結果、『目的遂行』との規定関係においては、「年齢」(-.358, $p < .05$) が有意な規定力を示し、『自己解決』

との規定関係においては、「年齢」(-.357, $p < .05$)、「カターレアカデミーへの所属歴」(.469, $p < .01$) が有意な規定力を示した。このうち、「年齢」の結果について、規定力が負の値を示していることで解釈が困難となっていることから、本研究における社会化要因として言及することは避けた。

「カターレアカデミーへの所属歴」の結果について、所属年数を重ねることで、カターレアカデミーにおける『重要な他者』や『社会化場面』との接点が増え、相互行為の質も併せて変容していくことが、社会性獲得を規定する要因となっていると考察する。

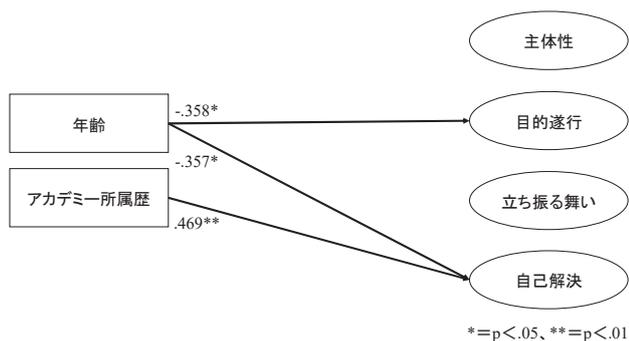


図2 年齢及び所属歴の社会性項目への規定関係（重回帰分析）

(2) 他者との関わり

「チーム内での他者との関わり」に関して、一次調査の結果から『重要な他者』になり得ると捉えた4項目を独立変数、社会性を構成する4因子を従属変数として、重回帰分析を行った（図3）。

『主体性』との規定関係においては、「他のカテゴリーの選手」（.248, $p < .05$ ）が有意な規定力を示した。

『目的遂行』及び『立ち振る舞い』との規定関係においては、「指導者」（.332, $p < .05$ 、.321, $p < .05$ ）が有意な規定力を示した。Jリーグは、世界的な競技水準の選手を輩出することをアカデミーにおける目的の一つとして掲げており、カタール富山も同様である。また、観察調査において、指導者からトレーニング中に、「（トレーニングへの取り組みに対して）俺にあおられてもダメ」「プライドを持ってやろう」という発言をする場面がみられた。

以上のことからカタールアカデミーとしてより高いレベルの選手を育成することを目標とする中で、選手を育成する立場にある指導者が、選手に対して、より高いレベルの目標を設定することや、選手個人の目的や目標に対して取り組んでいくことを期待していることが推察される。

加えて『立ち振る舞い』に関しては、指導者と選手の間に関わりに関して、練習の前後に指導者から選手に対して返事やあいさつをすることを求める様子や、トレーニング中に「声出せ」「褒め合えよ」「明るい声を出しながら」「良いボール入ったら（良いということを）言ってやれよ」といった発言をする場面が、観察調査において確認された。

これらは、状況や自身の立場に応じた考え方や振る舞いを期待する場面と捉えられるであろう。そし

て、こういった指導者からの要求を受けることで、組織やチームの内での自身の振る舞いや役割への意識及びそれに基づいた行動に影響を及ぼしているといえよう。

『自己解決』に対しては、「チームメイト」（.248, $p < .05$ ）が有意な規定力を示した。チームメイトとの関わりにおける具体的な場面として、怪我によってチーム練習に参加できない選手たちが、互いに相談しながらトレーニングに取り組む様子や、チームメイト同士でトレーニングメニューを聞き合い、教え合いながら練習に取り組む様子、試合のハーフタイム中に、出場している選手同士で話し合う様子が、観察調査でみられた。

この結果から、自分やチームの課題及び問題解決に向けて、様々な形で情報収集しながら、自主的に行動することがアカデミーにおいて期待されている中で、チームメイトとの相互の関わりの中での実践を通じて、起こっている問題や自身の課題に対して自主的に取り組む姿勢を身に付けていることが推察される。

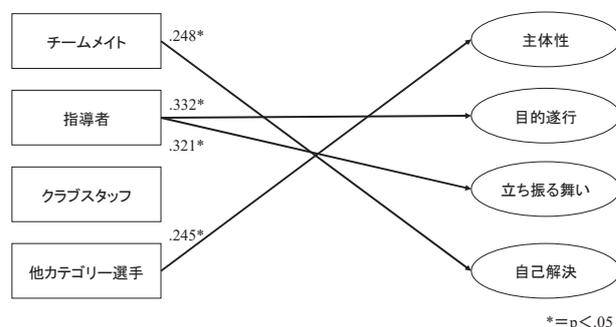


図3 他者との関わりと社会性項目の規定関係（重回帰分析）

(3) アカデミーでの活動に対する取り組み

「カタールアカデミーの活動に対する取り組み」に関して、一次調査で確認した練習と試合に関する9項目を独立変数、社会性の4因子を従属変数として、重回帰分析を行った（図4）。

『主体性』との規定関係において、「練習時間後の自主練習」（.384, $p < .01$ ）が有意な規定力を示した。「練習時間後の自主練習」に関して、『主体性』を規定する要因としての具体的な場面は観察調査において確認されなかったが、練習後の自主練習そのものが、選手によって主体的に行われる取り組みであり、カタールアカデミー選手における、主体的な行動や

自己表現といった社会性の獲得に影響を及ぼしていると推察される。

『目的遂行』との規定関係においては、「練習時間前の各自で行うウォーミングアップ」(-.269、 $p < .05$)、「練習時間後の自主練習」(.295、 $p < .05$)、「試合前のチームで行うウォーミングアップ」(.442、 $p < .05$)が有意な規定力を示した。このうち「練習時間前の各自で行うウォーミングアップ」の結果に関して、前出の「年齢」と同様に、本研究における社会化要因として言及することは避けた。

中でも、「試合前のチームで行うウォーミングアップ」に関して、観察調査において、試合にメンバー入りしていない選手が、チームで行うウォーミングアップを補助する立場として関わっている様子がみられた。チームとしての決めごとか、選手たちが自主的に行っているかは明らかではないが、練習前や試合前の各自で行うウォーミングアップでは見られなかった、試合前のチームで行うウォーミングアップ特有のものである。

メンバー入りした選手は、試合の準備を目的としてメニューに取り組み、そしてメンバー入りしていない選手は、メンバー入りした選手の試合への準備の質の向上やチームの勝利を目的として、ウォーミングアップの手伝いや補助を行うというように、試合に出る選手やチーム全体のために、選手それぞれが取り組む場面としてウォーミングアップが位置付けており、『目的遂行』に関する社会性を獲得することに影響を及ぼしていることが推察される。

続いて、『立ち振る舞い』との規定関係において、「練習時間中のトレーニング」(.304、 $p < .05$)と「練習時間後の自主練習」(.276、 $p < .05$)が有意な規定力を示した。中でも「練習時間中のトレーニング」に関しては、負荷や強度の高いトレーニングの最中に、選手からは「いこう」「やろう」「はやくやろう」といった発言が、同時に指導者からは「褒め合えよ」「明るい声を出しながら」といった発言が、観察調査において確認された。

これらは、特定の選手やチーム全体に対し、トレーニングへの姿勢や、トレーニングの状況に応じて取るべきプレーや行動などについて働きかけているものであると捉えられる。状況に応じて、トレーニングへの姿勢や、取るべきプレーや行動などについて、チームメイトや指導者などからの働きかけを受けながら学習していく場面として、トレーニングが位置

付けており、『立ち振る舞い』に関する社会性の獲得に影響を及ぼしていると考えられる。

『自己解決』との規定関係においては、「試合前の道具等の準備」が有意な規定力 (.441、 $p < .01$)を示した。

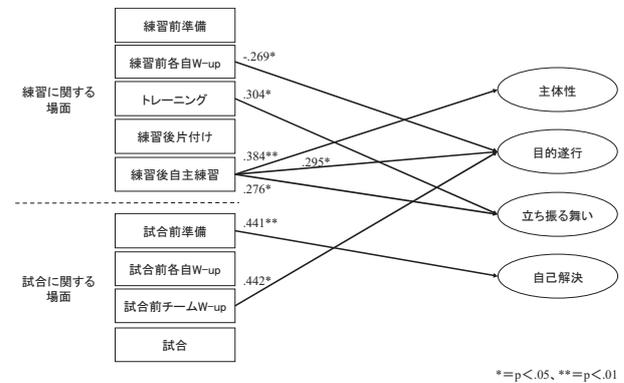


図4 カターレアカデミーの活動への取り組みと社会性項目の規定関係 (重回帰分析)

(4) ホームゲームでのボランティア活動

「ホームゲームでのボランティア活動」に関する質問項目を独立変数、社会性を構成する『主体性』、『目的遂行』、『立ち振る舞い』、『自己解決』を従属変数として、それぞれ単回帰分析を行った (図5)。

結果、『主体性』、『目的遂行』及び『自己解決』との有意な規定関係が示され、選手の人間形成に影響を及ぼしていることが示唆された。

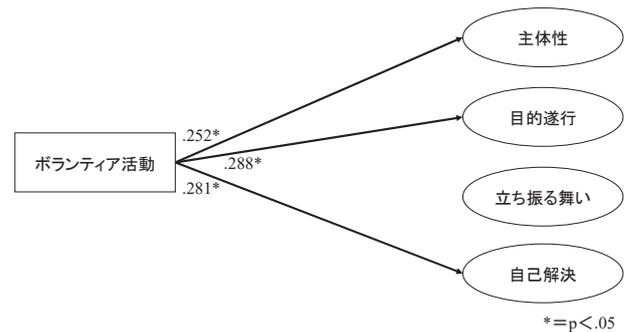


図5 ホームゲームでのボランティア活動の社会性項目への規定関係 (重回帰分析)

(5) クラブの社会貢献活動

「社会貢献活動」に関する質問項目を独立変数、社会性を構成する『主体性』、『目的遂行』、『立ち振る舞い』、『自己解決』を従属変数として、それぞれ単回帰分析を行った (図6)。

結果、『主体性』、『目的遂行』及び『立ち振る舞い』

との間で有意な規定関係が示され、ボランティア活動同様に選手の人間形成に影響を及ぼしていることが推察される。

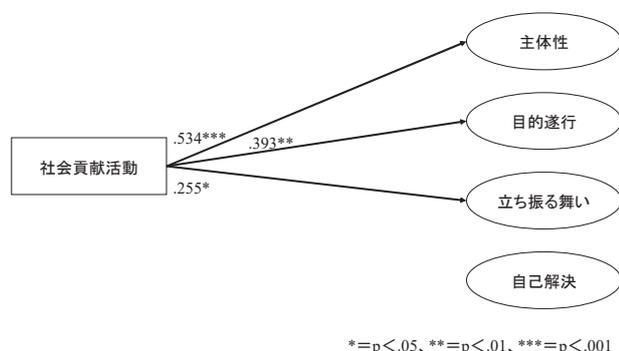


図6 社会貢献活動の社会性項目への規定関係(重回帰分析)

4) 社会性獲得と内部昇格への志向性の関係

社会性の獲得と将来に対する志向性との関係について検証するため、社会性の各因子得点に関して、平均以上の群を「高群」、平均以下の群を「低群」とし、2群間におけるアカデミーのユースチームからトップチームへの内部昇格に対する志向性の平均値を比較した(図7)。

結果、『主体性』及び『目的遂行』に関して、低群と高群の間で、内部昇格に対する志向性に有意差が確認され、特定の社会性の獲得度合いが高いカターレアカデミー選手ほど、内部昇格をより強く志向していることが示された。

よって、クラブとしてアカデミーから内部昇格する選手を輩出することを目指す上で、競技者育成の視点からアカデミー選手の競技レベルを高めていくことが重要であると同時に、人間形成の観点からは、『主体性』や『目的遂行』といったような社会性の獲得を促すことで、内部昇格に対する志向性が高いアカデミー選手の育成に繋がることを示唆された。

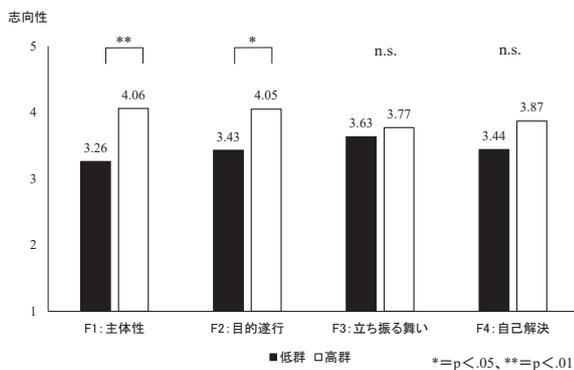


図7 内部昇格に対する志向性得点の平均値比較(社会性因子得点別)

2. 部活動選手との比較

1) 社会性の獲得に関する比較

カターレアカデミー選手が獲得している社会性構造として確認された4因子20項目について、社会性の各因子得点の平均値を、カターレアカデミー選手と部活動選手において比較した。

その結果、全ての因子得点に関して、カターレアカデミー選手と部活動選手の間に統計的に有意な差は示されなかった。よって、社会性の獲得という観点では、カターレアカデミー選手と部活動選手で同水準の人間形成が実現していることが示唆された。

2) 所属歴と社会性獲得との規定関係の比較

部活動選手における「年齢」「現在所属しているチームへの所属歴」を独立変数、社会性を構成する4因子を従属変数として、重回帰分析を行い、その結果を前出のカターレアカデミー選手における結果と比較した(表3)。

カターレアカデミーへの所属歴が『自己解決』のみに規定力を示しているのに対し、部活動への所属歴は全ての社会性因子に対して規定力を示していることから、部活動と比較して、カターレアカデミーへの所属歴は、限定的な社会化要因となっていることが窺える。

表5 所属チームへの所属歴と社会性の規定関係(カターレアカデミー及び部活動、重回帰分析)

	F1:主体性	F2:目的遂行	F3:立ち振る舞い	F4:自己解決
カターレアカデミー	.146	.179	.194	.469 **
部活動	.205 **	.147 *	.201 **	.207 **

*= $p < .05$, **= $p < .01$

3) 他者との関わりと社会性獲得との規定関係の比較

続いて、部活動選手における「チーム内での他者との関わり」に関して、「チームメイト」「指導者」を独立変数、社会性を構成する4因子を従属変数として、重回帰分析を行い、その結果を前出のカターレアカデミー選手における結果と比較した(表4)。

部活動選手ではどちらも全ての社会性因子との間に規定関係がみられたが、カターレアカデミー選手においては、どちらも限定的な社会性の獲得にのみ規定力を示しており、カターレアカデミー選手において、チームメイトや指導者との関わりが、獲得に影響を及ぼす社会性は、部活動選手と比較して限定的であるといえる。

このことについて、部活動選手は、部活動以外の学校生活において、チームメイトや指導者に関わる機会がある一方で、カターレアカデミー選手はアカデミーでの活動時のみにその機会が限定されていることが想定され、社会性の獲得への影響が限定的なものとなっているのではないだろうか。また、そういった他者との関わりの影響が蓄積された結果として、前出の「所属歴」に関しても同様に、部活動と比較して限定的な社会化要因となっていると考察する。

表6 他者との関わりと社会性獲得との規定関係(カターレアカデミー及び部活動、重回帰分析)

	F1:主体性	F2:目的遂行	F3:立ち振る舞い	F4:自己解決	
チームメイト	カターレアカデミー	.059	-.040	-.055	.248 *
	部活動	.216 ***	.205 **	.288 ***	.178 **
指導者	カターレアカデミー	.176	.332 *	.321 *	.190
	部活動	.339 ***	.281 ***	.182 **	.226 **

*=p<.05, **=p<.01, ***=p<.001

4) 各種活動に対する取り組みと社会性獲得との規定関係の比較

最後に、部活動選手に関して、「部活動における各種活動」への取り組みに関する、前出の9項目を独立変数、社会性を構成する4因子を従属変数として、重回帰分析を行い、その結果をカターレアカデミー選手と比較した(表5)。

その結果、社会性獲得の要因となるチームの活動に関して、部活動選手とカターレアカデミー選手において、同様の傾向が示された。

また、試合前にチームで行うウォーミングアップへの取り組みに関して、カターレアカデミーでのみ社会性の獲得に対して有意な規定力(.442, p<.05)を示したことから、カターレアカデミー特有の『社会化場面』であることが示唆された。

しかし、部活動選手においては規定関係が見られなかったものの、その他のウォーミングアップに関する場面では、カターレアカデミーでは示されなかった規定関係が部活動選手において確認された。

上記を踏まえると、ウォーミングアップへの取り組みに対するチームの方針や取り組み方が、カターレアカデミーと部活動で異なっていることが想定されるのではないだろうか。

加えて、カターレアカデミーにおける他者との関わりは、部活動選手と比較して限定的な社会化要因となっていることは前述の通りであり、その限定的な他者との関わりの中で、カターレアカデミーにお

いては、チームで行うウォーミングアップが『社会化場面』として位置付いていることが推察されよう。

表7 チームの活動への取り組みと社会性との規定関係(カターレアカデミー及び部活動、重回帰分析)

	F1:主体性	F2:目的遂行	F3:立ち振る舞い	F4:自己解決	
練習前各自w-up	カターレアカデミー	-.080	-.269 *	-.098	-.032
	部活動	.102	.069	.149 *	.089
トレーニング	カターレアカデミー	-.160	-.108	.304 *	-.227
	部活動	.098	.162 *	.023	.078
練習後自主練習	カターレアカデミー	-.384 **	.295 *	.276 *	.211
	部活動	.246 ***	.191 **	.152 **	.066
試合前準備	カターレアカデミー	-.056	.227	.118	.441 **
	部活動	.083	.173 *	.092	.190 **
試合前各自w-up	カターレアカデミー	-.330	-.169	-.054	.001
	部活動	.189 *	.029	.065	.209 *
試合前チームw-up	カターレアカデミー	-.361	.442 *	.050	.334
	部活動	-.028	.067	.071	-.037

*=p<.05, **=p<.01, ***=p<.001

3. 仮説の検証

本研究の対象であるカターレ富山のアカデミー選手に獲得されている社会性において、『主体性』『目的遂行』『立ち振る舞い』『自己解決』の構造が確認された。

よって、「H1:カターレアカデミー選手は、社会性を獲得している。」は支持されたといえよう。

カターレアカデミーにおける社会化要因に関して、『個人的属性』として「カターレアカデミーへの所属歴」、『重要な他者』として、「チームメイト」「指導者」「他のカテゴリーの選手」、『社会化場面』として「練習時間中のトレーニング」「練習時間後の自主練習」「試合前の道具等の準備」「試合前のチームで行うウォーミングアップ」「ホームゲームでのボランティア活動」「クラブの社会貢献活動」がそれぞれ存在していることが示唆された。

よって、「H2:カターレアカデミー選手の個人的な特性が、選手の社会性獲得に影響を及ぼす。」「H3:カターレアカデミーにおける他者との関わりが、選手の社会性獲得に影響を及ぼす。」「H4:カターレアカデミーにおける各種活動への取り組みや参加経験が、選手の社会性獲得に影響を及ぼす。」はそれぞれ支持されたといえよう。

また、以上の結果は、スポーツ的社会化について、『個人的属性』『重要な他者』『社会化場面』という3要因と、それらの相互作用による役割学習の過程であるとした、G.S.Kenyon & B.D.McPherson(1973)の主張¹⁾と符合しているといえるだろう。

カターレアカデミーにおいて、社会性獲得の度合いが高い選手ほど、トップチームへの内部昇格に対

する志向性が高くなっていることが確認された。

よって、「H5：カターレアアカデミー選手は、社会性を獲得することで将来に対する志向性が変容する。」は、支持されたといえよう。

最後に、部活動選手との比較においては、社会性獲得の割合は同程度であり、社会化要因についても同様の傾向が示された。一方で、カターレアアカデミー選手において確認された「試合前のチームのウォーミングアップ」と社会性獲得との間の規定関係について、ウォーミングアップに対するチームの方針や取り組み方、および他者との限定的な関わりの中で、カターレアアカデミー特有の社会化要因であることが窺える。なお、その他にも、カターレアアカデミー特有である、「他のアカデミー選手」との関わりや「ホームゲームにおけるボランティア活動」及び「クラブの社会貢献活動」への参加経験が、社会化要因として位置づいていることがこれまでに明らかとなっている。

よって、「H6：部活動選手と比較して、カターレアアカデミー選手特有の人間形成の過程が存在する。」は支持されたといえよう。

Ⅵ 結語

カターレアアカデミーで実現している選手の人間形成について、スポーツ的社会化の理論的枠組みを援用しつつ以下に示した（図8）。

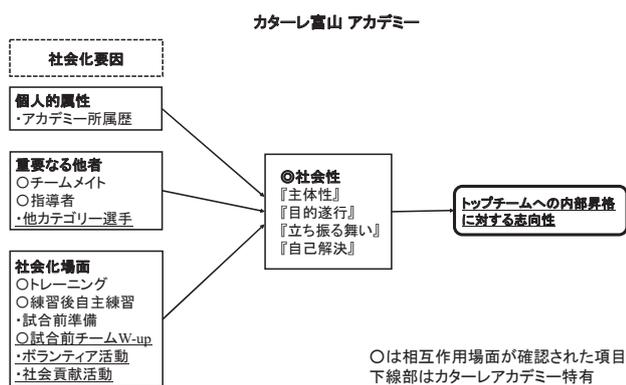


図8 カターレアアカデミーで実現している選手の人間形成の全体像

本研究で得られた知見及び上述してきた仮説の検証結果について、「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」の視点から、先述した三本松(1982)による定義⁸⁾を参照しつつまとめると、「カ

ターレアアカデミーへの所属というスポーツ参加の形式において分類されている、他者との関わりや活動への取り組み及び内部昇格等に関わる役割の獲得」という「スポーツへの社会化」の過程が存在し、その過程を包括しつつ、「選手がカターレアアカデミーにおける役割を遂行する中で、『主体性』『目的遂行』『立ち振る舞い』『自己解決』といった社会性や、自身の将来に対する志向性等を身に付けている」という「スポーツによる社会化」の過程が存在している、と表すことができるだろう。

本研究で得られた知見を基に、指導現場、クラブ、リーグが包括的に連携し、選手のより良い人間形成に向けた方策や具体的取り組みの検討が行われることを期待したい。

研究継続上の課題

本研究で対象としたカターレアアカデミーそのもののサンプル数に限界があり、分析上の信頼性と妥当性に検討の余地を残す結果となった。山本(2012)は、スポーツによる社会化において獲得される社会性は、「国や地域の文化や所属する準拠集団の影響が反映された、ある種の限定的で不完全な社会性」であると指摘している(14)ことに鑑み、本研究で得られた知見を基に、対象とするクラブを拡げ、それに伴ってサンプル数についても拡大していくことが求められよう。

また、部活動選手に対しては、質問紙調査のみ実施し、その分析結果からカターレアアカデミー選手との差異を検討した。しかし、カターレアアカデミー選手と同様、質的な調査を実施し、個別具体的な場面や現象について明らかにしていくことで、両者のそれぞれの特徴や差異を事細かに検討していく必要性があるだろう。

最後に、本研究で援用したスポーツ的社会化論の観点から言及する。本研究においては、カターレアアカデミーでの活動を通して、いわば社会化「される」側である選手の視点から研究を進めてきた。しかし、選手に対してカターレアアカデミーでの活動を提供している、いわば社会化「する」側である指導者や選手の保護者、クラブ等の複合的な視点から調査及び研究を進めることで、より深くカターレアアカデミー選手におけるスポーツ的社会化の様態を明らかにすることができよう。

本研究においては、観察調査や質問紙調査に関し

て、定点的な観測に留まっており、今後一層実態に則したカターレアカデミーのスポーツ的社会化の様態を明らかにしていく上では、縦断的に選手の意識やアカデミーの活動実態、クラブの状態等に迫る調査（縦断研究）が求められる。

更に、本研究においては、カターレアカデミーにおいて実現している選手の人間形成について明らかにするべく、観察調査やヒアリングによってアカデミーでの他者との関わりや活動を整理した上で、設問や発問の内容について事細かに検討し、質問紙調査を実施した。今後は、スポーツ場面における社会化過程だけではなく、スポーツ場面で得た経験がスポーツ以外の社会生活とどのような繋がりを持ち、各個人が社会化されていくのかということについて、対象とする場면을拡張することで、より俯瞰的に検討していく必要があるだろう。

謝辞

本研究の調査に多大なるご理解、ご協力を頂いた、株式会社カターレ富山の皆様ならびに中学校、高校サッカー部の指導者の皆様、そして貴重な回答データをご提供していただいた選手の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) Gerald S.Kenyon・Barry D.McPherson、Becoming Involved in Activity and Sport: A Process of Socialization、Physical activity : human growth and development, Academic Press, 1973
- 2) 原田大輔、高体連 VS Jクラブユース 育成年代 日本サッカーの将来を担うのはどっちだ!?, 東京ニュース通信社、2019
- 3) 芳地泰幸・山田泰行・青葉幸洋・岩浅巧・江波戸智希・水野基樹、Jクラブユース (U-18) 選手の人材開発を目的としたチームビルディング・プログラムの導入とその効果の検討、スポーツ産業学研究 ,29,:125-135、2019
- 4) Jリーグホームページ Jリーグとは、 < <https://aboutjleague.jp/corporate/aboutj/> > 2022年1月16日閲覧
- 5) カターレ富山ホームページ < <https://www.kataller.co.jp/academy/> > 2022年1月16日閲覧
- 6) 能智大介・児玉ゆう子・平田竹男、Jリーグのホー

- ムグロウン制度導入に際するJクラブユースと高校および大学の育成環境の違い選手の人数と活躍の実態、スポーツ産業学研究 ,30,1-11、2020
- 7) 太田雅夫・柳澤裕哉、スポーツにおける社会化要因の検討－競技スポーツ参与に影響を及ぼす他者と活動継続要因について－、天理大学学报 ,54,:27-35、2003
- 8) 三本松正敏、スポーツ的社会化研究の展開と課題、日本体育学会大会号 ,33:p172
- 9) 笹川スポーツ財団 (2019)、スポーツライフ・データ 2018 調査結果 1. 運動・スポーツ実施状況、 < https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/pdf/sld2018/sld2018_surveyspdf01.pdf > 2022年1月16日閲覧
- 10) 笹川スポーツ財団 (2020)、子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2019 調査結果 1. スポーツ実施状況、 < https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/pdf/sld2019_cy/sld2019_cy_surveyspdf01.pdf > 2022年1月16日閲覧
- 11) スポーツ庁ホームページ スポーツ基本法 < https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/detail/1372293.htm > 2022年1月16日閲覧
- 12) 住田健・藤本淳也、青少年の運動・スポーツ実施の有無に影響を与える要因：スポーツへの社会化概念を援用して、スポーツと人間：静岡産業大学論集 ,11,:27-35、2017
- 13) 山本浩二、学校運動部活動が子どもにもたらす「社会性」の質的構造に関する探索的研究、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書、2013
- 14) 山本順之、「スポーツによる社会化」に関する社会学的研究：重要な他者の影響について、九州国際大学教養研究 ,19,:37-57、2012

受付年月日 (2022/10/19)

受理年月日 (2022/12/20)